

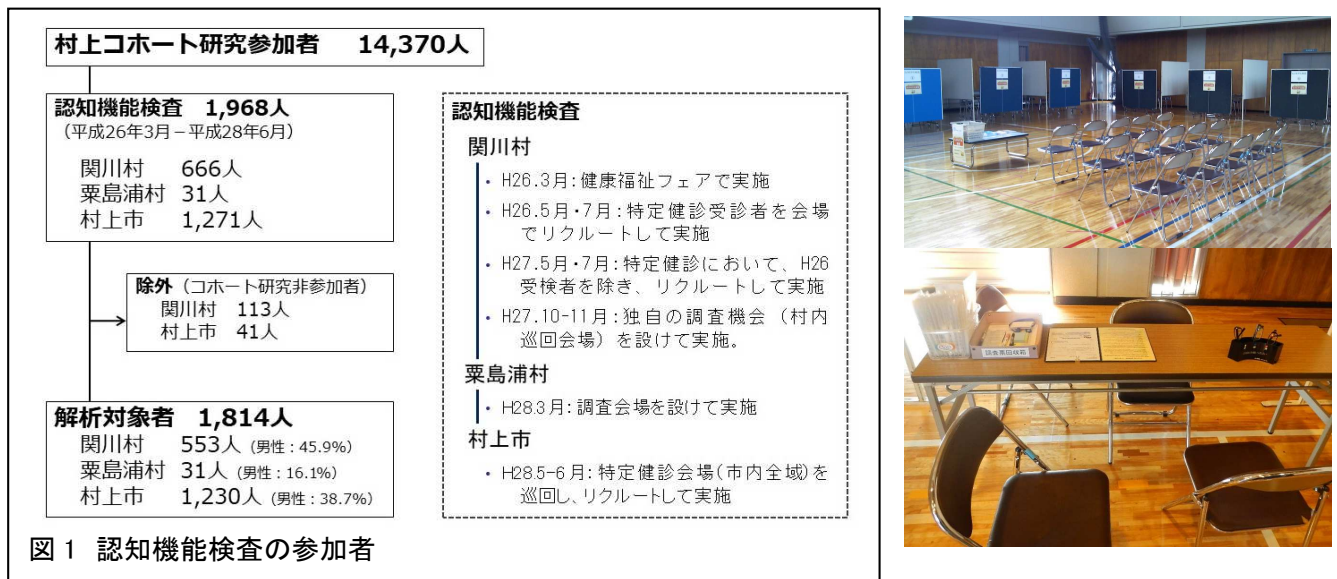
Weight loss from 20 years of age is associated with cognitive impairment in middle-aged and elderly individuals

20歳からの体重減少は中高年者の認知機能障害に関連する

PLOS ONE 2017;12(10): e0185960

論文概要

私たちは、認知機能障害や認知症予防を目的として、認知機能障害にかかわる要因を調べました。村上コホート研究参加者(N=14,364)の一部の方に協力いただき、2014~2016年に面接による認知機能検査(MMSE)(資料1)を行いました。MMSEを行った方は1,814人(44~79歳)でした(図1)。



MMSEは30点満点の検査で、23点以下を認知機能障害ありと定義しました。体格や生活習慣の情報は2011~2013年に行った健康調査票の結果を利用しました。

横断的な解析を行った結果、6.2%に認知機能障害が見られました。さらに、認知機能障害に関わる要因を調べたところ、20歳からの体重の変化が認知機能障害と関連していました(図1)。具体的には、20歳からの体重変化が4~7kg増のグループで認知機能障害を持つ人が最も少なく、体重が減っているほど認知機能障害が多いという結果でした。4kgより多く体重が減ったグループではもっとも認知機能障害が多く、統計学的にも確かでした。8kg以上増のグループのオッズ比も高いのですが、統計学的に確かではありませんでした。

この研究により、長期的な体重減少は認知機能障害に関わっていることが示唆されました。今後、前向きな縦断研究によってこの所見を確認する必要があります。

調整オッズ比

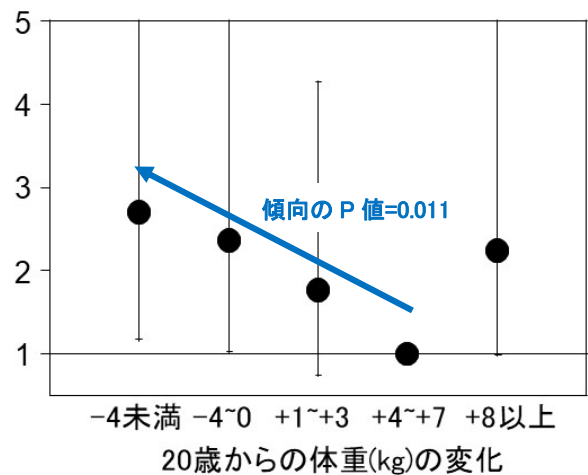


図2 20歳からの体重の変化と認知機能障害
調整オッズとは、4~7kg増のグループを基準とした場合、他のグループにおける認知機能障害を持つ人の相対頻度を示しています(性、年齢、生活習慣等の要因を調整後)。